

## VIII. 染色と縫製

赤草のアップリケは量が少く、切片をとって試料にできかね、表面観察で推定するしか方法はない。今のところ明礬鞣（もしくはタンニン併用）革に、アカネカケルメスで染めたと推定するが、そのいずれであるかは決定できない、

アップリケには藍革もある。最初黒ずんで見えたので、湿気で膠化したものと推定していたが、カラー写真に撮ってみると青色である。写真で青色だから藍で染めたか塗ったか（タンニン鞣の上に）と断定するのは早計でもあるが、これには幾多の経験がある。<sup>註</sup>インド藍又は大青である。

註 (a) 十年前タイのバンコクの郊外で黒柿を搾った液に200回から400回漬けては広場にひろげて日光に当てて発色する珍しい黒染法があった。その回数を200位で黒く見せるために、藍で下染しているものもある。何れにしても染め上りは肉眼で黒に見えて区別はつき難い。ところが、カラーフィルムで撮ると青色が濃く出てくる。

(b) 近年秋徳島の蓼藍の干し葉を醗酵させる染（すくも）作りを取材した。100日近く経って黒褐色の推肥状になって仕上がり前であったが、之も見事に写って驚いた。

以上のようにカラーフィルムの感光性質は意外に藍染の主成分、インディゴに敏感である。メーカーにより若干の差はあるが、何れも似た性質をもっている。そこで試料破片を試験管の中でアセトンに浸漬すると、インディゴが溶解して青色となることにより証明出来る。尚、資料が多ければ還元するか、昇華程度を調べる方法がある。

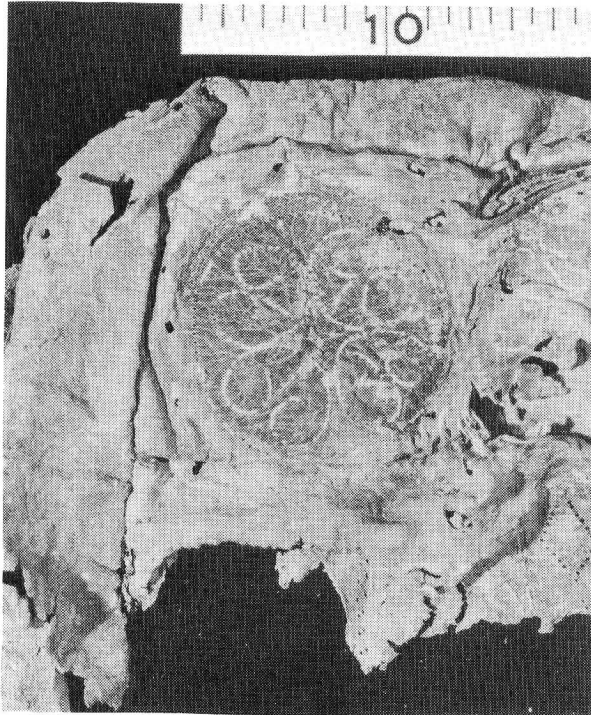
次に縫製とその結果の製品のことをかんがえてみたい。また縫製の糸であるが、その最も原始的な材料は動物の腱糸であったとおもわれる。動物の筋肉の腱を洗浄し、これを割いて乾すと非常に強い糸が得られる。狩猟民のことごとくが知っていたもので、アル・タール発掘品のなかにも腱糸の使用がみられた（AL-TAR, I, Fig. IV-44 及び Pl. LXXVIII-a）。

次には麻のような強い靱皮繊維で縫ったものがある。また、革を渦巻き型に切って製する長い糸を用いた例も存在している。渦巻き型に切る方法は、エジプトのルクソール遺跡の壁画のなかにも見受けられる（図版 X, 図 VIII-1～7, AL-TAR, I, Pl. LXXVIII-b）。

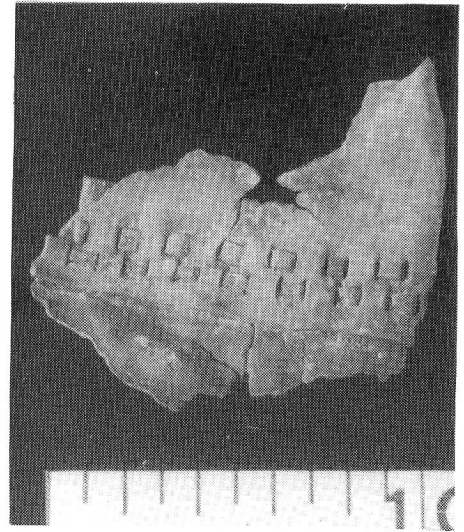
このように、アル・タール遺跡の皮革の縫製には3種の糸が使用されているが、わけても、腱糸の場合は非常に細かく縫ってあるので、ミシンによる縫製と思いこんだ人がいるぐらいである。

残念なことに、衣料として完品に近いものは出土していないため、どのような様式の衣料であったのか、いまの段階では測り知ることにはできないが、上衣・ズボン・刃物鞘・袋物・アップリケ（AL-TAR, I, Pl. XXVIII-a, Fig. IV-44, 及びカラー図版にも）等が今考えられる。ワッペン型の小円型アップリケはパルミラの革らしいズボンにあらわされている文様にちかいものと想像される。アルサケス朝期の王将の彫刻をみるとそのズボンのたるみ具合は布製でなく革製であるようにおもわれる。

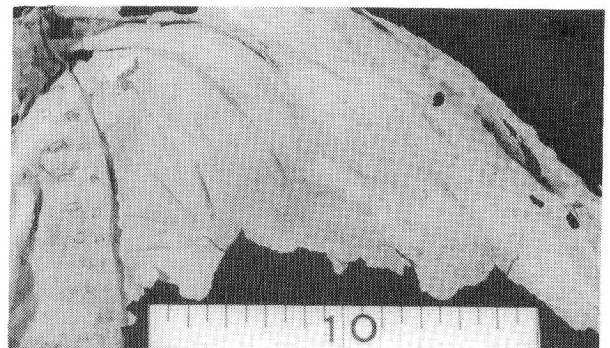
これらの問題の解明は今後に待つばかりではない。他に革紐がある（図 VIII-8, 9）。なお毛皮製品はないようにおもわれる。



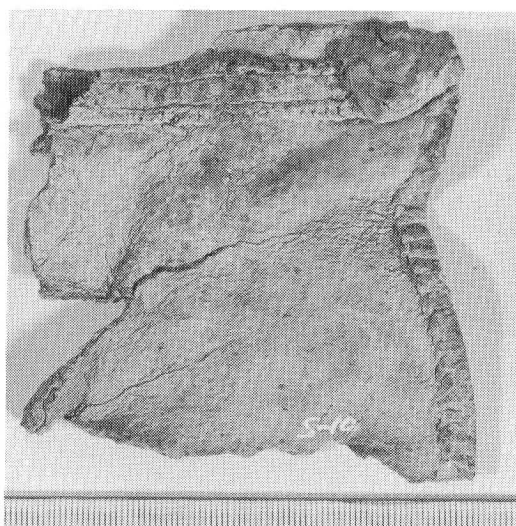
図Ⅷ—1 麻糸色革アップリケ  
(C丘—17、Ⅳ—MK—1341—1)



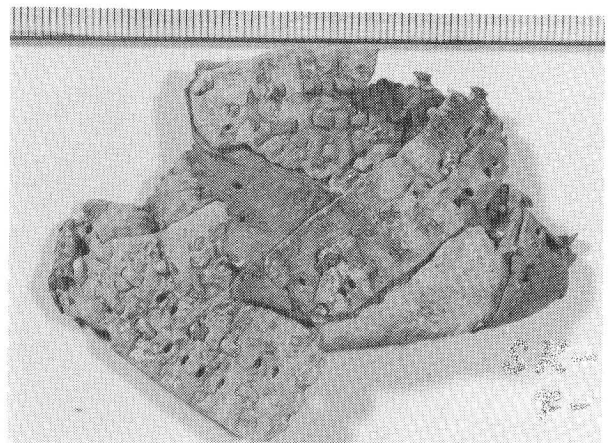
図Ⅷ—2 革糸ぬいこみ  
(A丘B—3、S—30)



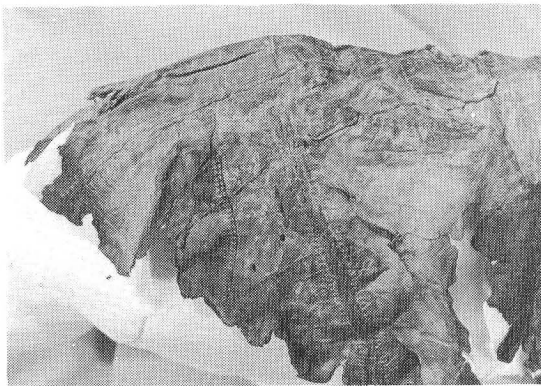
図Ⅷ—3 革糸二重縫  
(C丘—17、Ⅳ—MK—1341—4)



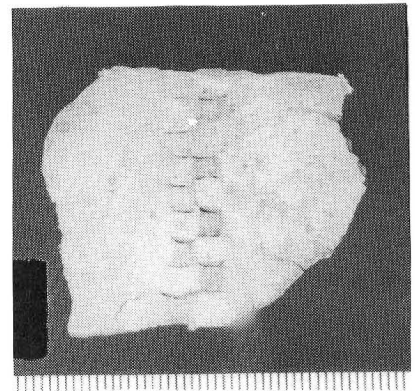
図Ⅷ—4 二重縫合せ (A丘D—5、S—10)



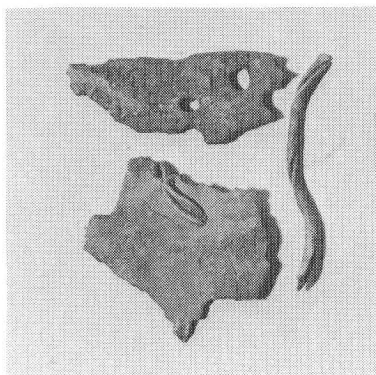
図Ⅷ—5 多重縫合せ



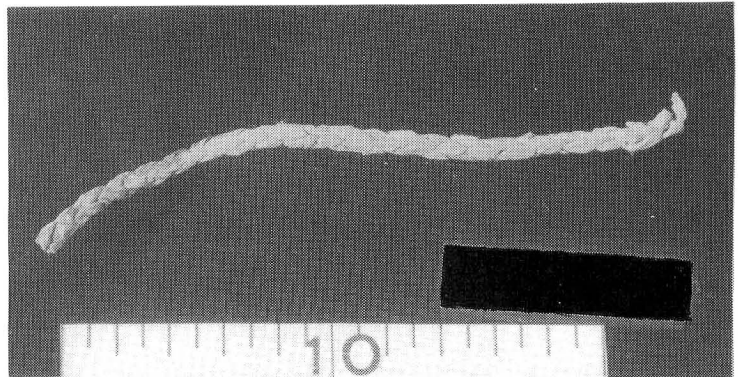
図VIII-6 縫合せ (A丘F-6)



図VIII-7 市松二条縫  
(A丘E2-1、SK-03)



図VIII-8 革撚り紐  
(A丘F-1、SK-48)



図VIII-9 革組紐 (A丘F-5)